寿都町の室内運動会に地域の子育て仲間と参加した中川家。右から次男の瑛士郎ちゃん、久理子さん、長男の琳太郎ちゃん、中川貴史さん

医挑む

第1部 寿都から

⑥母との両立

育児通じ地域に浸透

「走れっ」「よし、がんばって」

徒競走やハイハイ競走に子どもたちが体を弾ませ、声援が飛ぶ。

6日、後志管内寿都町での室内運動会「ちびリンピック」の応援席に、町立寿都診療所でパート勤務する家庭医の中川久理子さん(34)の姿があった。

休日当番をぬって駆けつけた診療所所長で夫の中川貴史さん(34)と2人で、4歳の長男と1歳の次男の成長に目を細めた。

サークル参加

久理子さんは北大医学部で貴史さんの1年後輩で、卒業後すぐに結婚。夫と同様、北海道家庭医療学センター（室蘭）で家庭医の研修を受け、2005年に寿都に派遣された。

勤務は平日の午前だけにした。子育てサークルや料理教室に顔を出すようにすると、自分と地域が自然に結びついた。

医師として診察していても、患者が個性ある「ひとり」として浮かび上がり、「その人の表情を見るだけでなんとなく悩みや痛みを感じられるように、自分自身が変化した」。

日本では女性医が急速に増えている。出産・育児での休職が医師不足の一因とも指摘されるが、「育児中の女性医の地域での役割はある」と、中川夫婦は感じている。

患者に安心感

派遣するセンターも、そうした効用から久理子さんのパートで住民の生活を支える医療を志した。だが、着任当時は「診察室と自宅の往復ばかり。地域になじむ状況ではなかった」。

それが変わったのは、長男を出産した4年前からだ。

3月上旬。中川家と同い年の子を持つ、寿都町の主婦滝沢真樹さん(39)は、高熱を出した2人の子を連れ、診療所に来た。

診察した久理子さんは、子どもたちの名前や性格をわかって、優しく声をかけた。子育てサークルで一緒に子どもを遊ばせているから、表情も和らぐ。

滝沢さんは「一緒に子育てしている久理子さんなら、気持ちが楽」と言う。

久理子さんはいま、3人目の子どもを身ごもっている。

子どもたちにとって寿都はきっとかけがえのない故郷になる。

「他の誰かのためでなく、自分たち家族のために地域の医療を良くしたい」。夫婦はこのマチで子どもを育て、自然と家庭医の力を伸ばしている。

女性医の増加

2008年時点で国家資格を持つ医師のうち女性の割合は18%だが、10年の国家試験合格者だけを見ると女性が33・2%を占めるまでに増えている。ただ、出産や育児などのため休業する人が多く、合格後11年目では女性医の24%が休職するとの調査結果もある。院内保育所の設置や短時間勤務医制度の創設など、女性医師が働きやすい環境の整備が医師不足解消のためにも求められている。

連載へのご感想をお寄せください。
▶Eメール iryou@hokkaido-np.co.jp
▶ファクス 011・210・5592